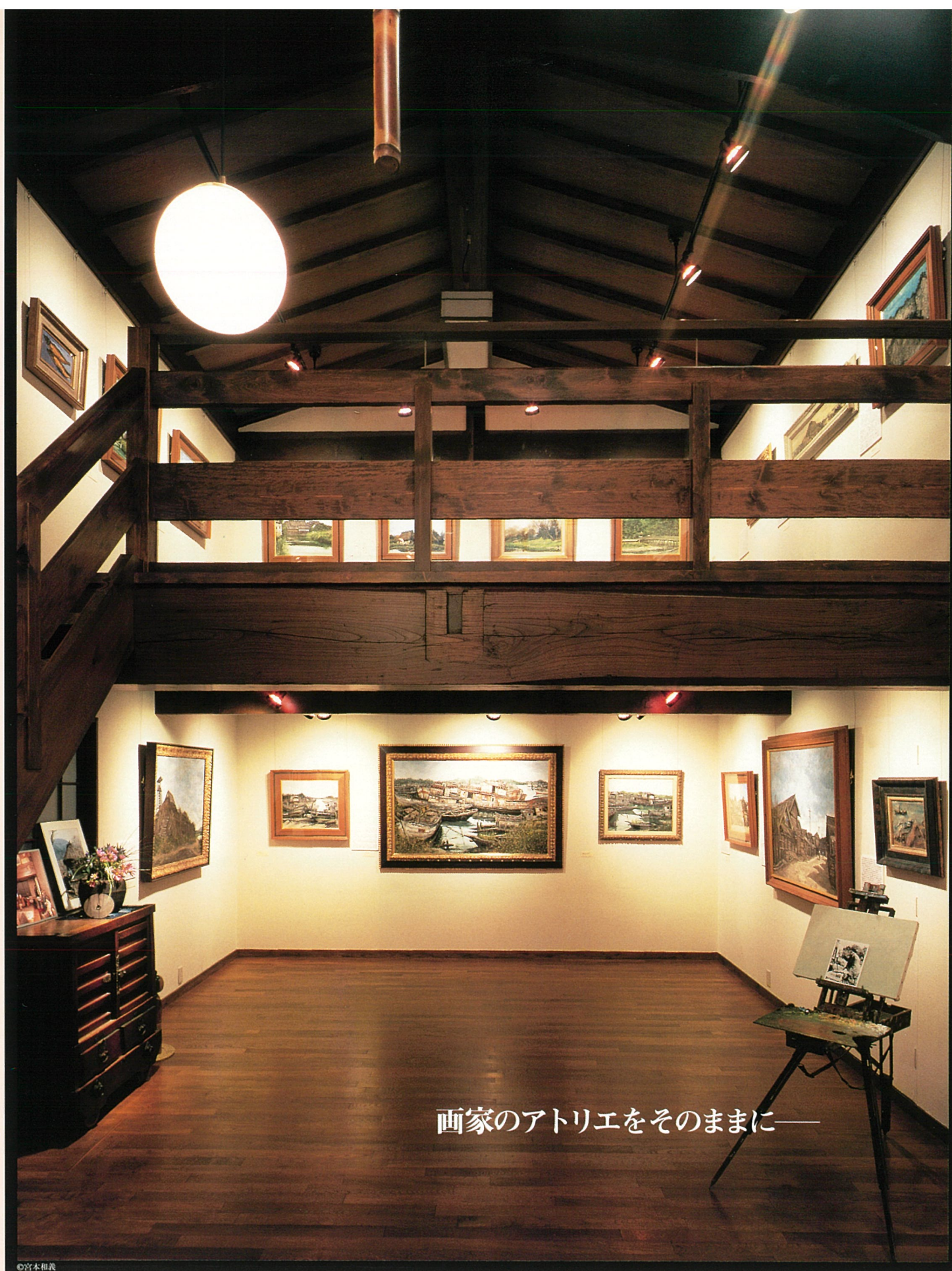


ルーヴル美術館での模写、戦争体験、そして民家を描き続けた画家の道程を探る



画家のアトリエをそのままに——

民家の画家・向井潤吉の道程

平成12年1月4日(火) — 3月26日(日)

開館時間：午前10時～午後6時(入館は5時30分まで) 休館日：毎週月曜日(ただし祝日と重なった場合は翌日)
観覧料：一般200円(160)、大高生150円(120)、中小生100円(80)、65歳以上及び障害者の方100円(80) ()内は20名以上の団体料金

世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

〒154-0016 東京都世田谷区荻巻2-5-1 TEL 03-5450-9581 FAX 03-5450-9583



遅れる丘の春より(長野県北安曇郡白馬村北城) 1986



宿雪の峽(長野県下水内郡栄村・秋山郷) 1983



素描 不詳(南方・兵隊) 1937~1944頃



自画像 1919



ばらの花を持つ女(ルノワールの模写) 1927



山家雪意(宮城県刈田郡七ヶ宿町関字横川) 1961

民家の画家・向井潤吉の道程

ルーヴル美術館での模写、戦争体験、そして民家を描き続けた画家の道程を探る

全国を行脚し、草屋根の民家という独特なモチーフを通じて、日本の原風景を描き続けた画家・向井潤吉の画業を、当館の収蔵作品を通じて回顧いたします。

向井潤吉は、1901年(明治34)、京都に生まれ、幼少より関心を寄せていた油彩画の世界へと進み、浅井忠が創設した関西美術院に学び、写実の基礎を身につけました。その後、昭和2年から5年にかけては単身で滞欧し、特にルーヴル美術館では数々の古典名画の模写を通じて、西欧美術の本質に触れながら、画家としての技術に磨きをかけ、さらに材料研究も深めていきました。

滞欧後、日本に戻った向井は、陸軍報道班員として戦地を巡り、各地で従軍画家として制作を重ねることになります。戦争という強大な暴力に蹂躪される人々の悲しみと、失われ行く風土や文化をつぶさに見聞するという経験は、一人の人間として、また画家としての向井の心中に、ただならぬ想いをもたらすことになったようです。

戦後の向井の画業は、その半生をかけて草屋根の民家をモチーフとして追い求めることに集約されていきます。季節ごとに様々な表情をみせてくれる日本の風土と、各地に根差し、それぞれに独特な趣をしめす民家、そして、そこに生きる人々の日々の営みに、向井潤吉の関心は高まっていくのでした。

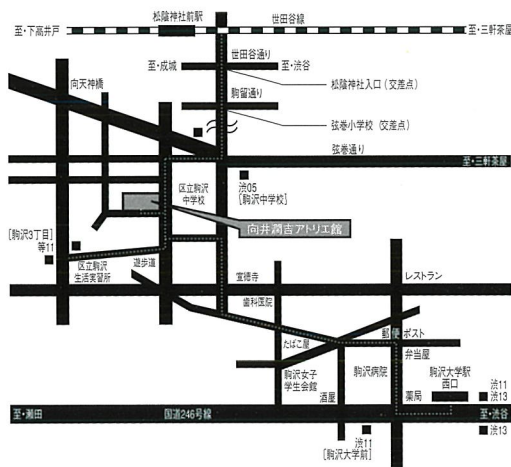
向井の制作は、つねに現場に赴きイーゼルを立て、鋭い観察眼と、的確な描写力を駆使しつつ、風土と自然にいだかれた、ありのままの民家の姿を描きとめていくものでした。

戦後の急速な経済成長の中で、草屋根の民家が姿を消していく慌ただしい状況は、向井の心に平穏をもたらすことはなく、向井を駆り立て、精力的な制作に拍車をかけていったように思われます。

失われていく日本の原風景を描き続けた向井が、膨大な制作を通じ見だし、確信したものは、いったい何であったのでしょうか。向井の70年近くに及ぶ画業の終着を示す数々の民家作品の放つ気配は、風土と人に、自然体で向き合ってきた彼の、幸福な喜びの心に満ちているように思えます。

交通機関

東急新玉川線	駒澤大学駅西口下車	徒歩10分
東急世田谷線	松陰神社前駅下車	徒歩17分
東急バス(渋05)	渋谷～弦巻営業所	駒沢中学校下車 徒歩3分
東急バス(等11)	祖師谷折返所～等々力	駒沢3丁目下車 徒歩3分
東急バス(渋11)	渋谷～田園調布	駒沢大学駅前下車 徒歩10分
東急バス(渋13)	渋谷～砧本村	駒沢大学駅前下車 徒歩10分



世田谷美術館分館 向井潤吉アトリエ館

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-5-1 TEL 03-5450-9581 FAX 03-5450-9583